

## 報告

日本技術士会北海道本部 社会活動委員会(北海道スタンダード研究委員会)

# 第29回勉強会 北海道を守った男の生涯

～陸軍中将 樋口季一郎の決断と行動～

市橋 加代

### 1. はじめに

激変する世界情勢の中で日本も北海道も平和が当たり前ではないということを改めて認識する今日、北海道を守った偉人であり、ここ数年でさらに再評価され、書籍やインターネット上で取り上げられている樋口季一郎氏を題材に、“陸軍中将樋口季一郎の決断と行動”を学ぶ勉強会を企画しました。

講師として、樋口中将直系のご令孫である樋口隆一先生をお招きして、開催しました。

隆一先生は樋口中将と住まいを共にしていたことから、裏話を多分に含んだ樋口中将の功績とその周辺の方たちとのご縁、また表に見えている出来事について実は裏で起きていた事実なども語られ、まさに講演会でしか聞けない多くの貴重なお話を聞くことができました。さらに樋口中将の人間味あふれた側面も多く語られ、幾度となく会場から笑いがおき、大変充実した講演会となりました。



写真-1 講師の樋口隆一先生

### 2. 講演会概要

講演：北海道を守った男の生涯

～陸軍中将 樋口季一郎の決断と行動～

講師：樋口隆一 様

(明治学院大学名誉教授)

日時：2024年11月29日(金)18:00～20:00

場所：TKP 札幌駅カンファレンスセンター

参加者：42名(会員15・会友5・非会員22)

### 3. 講演要旨

#### (1) 今回の講演にあたって

国防を考えたときには左も右もない。今のウクライナを見ていると、これから何が起きるかわからない今、80年以上も前の歴史を勉強することが、しっかりと日本を守っていくための今後の指針になると思う。例えば日本人は中立条約を一方向的に破棄して攻め入ってくることを想定しないが、ロシアは日常茶飯事でやってくる。このような歴史やその背景を学ぶことが重要であり、祖父について語り継いでいかなければと思っている。

#### (2) 激変する世界情勢

2022年2月に手嶋龍一氏(芦別市出身)のラジオ番組に招かれたが、その当日にウクライナが侵攻を開始したことから、手嶋氏は遅れてスタジオに入ってきた。彼から言われたのは「あの頃と同じ。もしソ連軍が留萌に上陸して釧路(不凍港である)を目指していたら、芦別でもブチャ同様の殺害と暴行が繰り返されていたはず。そうならなければ自分は生まれていなかったかもしれない。今の自分があるのも樋口中将のおかげです」と感謝された。

### (3) 北海道とのゆかり

樋口季一郎は私の父方の祖父にあたるとともに、私の両親は札幌で結婚し、母方の祖父の実弟である東季彦は新十津川出身で北海道新聞社初代社長を務めるなど、北海道との縁が何かと深い。

私自身はバツハ研究者であり、1972年に26歳でバツハ研究のために東ドイツに行き、戦後27年を経てなおロシア兵が銃剣で脅すことで維持されていた分割国家の惨状を体験し、祖父季一郎が果たした北海道防衛の意義を実感した。

祖父はロシア人にたくさん友達がいた。ロシアの個人は、芸術・文化・教養などに優れた人が多く、個人として付き合う分にとっても良いが、国(国家)となると全く違ってしまおうと言っていた。それを理解せず、あの素晴らしいロシア人が攻めてくるはずがないと思っている日本人がいまだに多い。

祖父が本を読むときは翻訳ではなくロシア語で読んでいた。例えばヒトラーの「我が闘争」(2015年までドイツでは禁書)ではユダヤ人の次の劣等民族はアジア人であると書いてある。当時の日本語版ではアジア人の部分がカットされていたため、彼らの本質を理解していない日本人が今でも多くいる。しかし諜報に長けた祖父は、ユダヤ人の次はアジア人が対象となると分かっていたのでユダヤ人を助けた。これは人道主義だけではなく、日本人や日本の将来を守るための現実主義である。

### (4) 日本の隣にある危機

1945年日本と連合国は戦いをやめ、武器を収める約束をしたはずだったが連合国の一員であったソ連はその機に乗じて北海道を侵攻し、福島県まで占領し、東京を分割統治して、日本をドイツのような分割国家にすることを画策していた。この事実は最近マッカーサー記念館で発見された資料に記されている。この時に季一郎率いる帝国陸軍第五方面軍が樺太や千島において命がけでその侵略を防ぎ、今の平和な日本を保障してくれた。

今起きているロシアによるウクライナ侵攻は、太平洋戦争の停戦後にソ連が日本を分割統治するため、樺太・千島に攻め込んできた北海道侵攻作戦を思い出させる。日本の「全て無難に」という姿勢は世

界的にはNGである。ロシアはいつでも来る。歴史を通じて今後のことを考えなければならない。

2018年プーチンはアイヌ民族をロシア民族だと主張し始めた。ロシアは侵攻時に「ロシア住民の保護のため」として理由を正当化する。北海道におけるロシア民族の保護という理由であれば、いつでもロシアは北海道に侵攻する。なぜならロシアと平和条約が締結されていない現状は戦闘状態ともいえるからだ。今でもロシアは日本の領空を侵犯しているが、そのことが大きな記事にならない。海上は国際法として無害通航権があるが、領空を侵す行為は相手国に明確な意図があることは間違いない。怖い出来事かもしれないがそれが現実である。

2022年2月ロシアによるウクライナ侵攻が始まり、2022年4月に「北海道の権利はロシアにある」とロシア政党の発言があった。日本の周りに危険な隣国が複数存在する以上、危機事態が常にあり得ると認識することが重要である。



写真-2 会場の様子

### (5) ロシア情報の専門家

祖父季一郎は1919年に陸軍大学校卒業後、ウラジオストック特務機関員(シベリア出兵)として大尉となる。シベリアでは日本軍と日本赤十字社はポーランド孤児765名を救出している。1920年にハバロフスク特務機関長として孤立し、余暇を使いピアノを覚える。1925年～28年はポーランド公使館付武官(少佐)、一生懸命ワルツを学びワルツの名人となって社交界の人気者になった。祖父は東洋人であり目立つことから、踊る相手としてよく指名されていた。

ソ連はポーランドの孤児(親を殺して)をシベリアに送るがただ放置する。今のウクライナに対してもロシアは同じことをやっている。それに対して、当時の日本はシベリアからポーランドの孤児を東京の赤十字に連れてきてポーランドまで送り届けたという歴史があるが、あまり知られていない。

同じころ、ポーランド大演習(仮想敵国ソ連・ドイツ)に日本代表として参加している。イギリス代表のアイアンサイド少将、米国代表マッケンネー大佐と同じ車に乗車し、世界情勢の裏面を学ぶ。何と言っても世界の機密情報をもっているイギリスと一緒にいたことは大変貴重であり、たくさん色々なことを教わった。

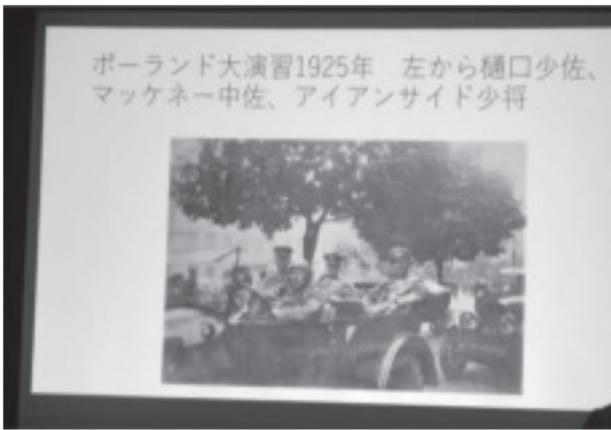


写真-3 ポーランド大演習で  
日本代表・イギリス代表・米国代表が同乗した様子

なおスターリンは終戦後、季一郎をシベリア送りにして死刑にしたかったようだ。表面には出ていないがイギリスの猛反対にあって免れた。アイアンサイド少将は後ほど英陸軍参謀総長となっているが、この当時の関係性があったからなのではないかと推察している。

1928年にはソ連の武官の好意でコーカサスやウクライナの視察を許された。終戦まではアメリカとソ連は仲良くしており、ソ連の船はアメリカ製であった。ソ連はお金がないのでアメリカから145隻を借りたが戦争後、鉄くず(お金)にしてアメリカに返さなかった。借りたものは返さないというのがロシアの考えである。

## (6) 北海道防衛作戦

1941年に帝国海軍が真珠湾を奇襲攻撃した。背後にソ連のスターリンの影があるなか、対米英戦争が開始された。祖父は1942年北部軍司令官、1943年北方軍司令官となり、北東太平洋作戦を指揮した。1943年にアッツ島守備隊の玉砕やキスカ島守備隊の無血全員撤退があった。その時にキスカ島で撤退して助かった兵士は、なぜ玉砕させてくれなかったのかと泣いて怒った。だが祖父はまだ生き残ってやるべきことがあると伝え、キスカ島の兵士が樺太と千島に送られる。アッツ島で玉砕した戦友に代わり彼らは強く戦ったという記録が残っている。

この時にすでに戦争に負けることを祖父は分かっていた。1945年2月に参軍本部の使者がソ連参戦の可能性を伝える。7月に阿南陸軍大臣の札幌来訪があり、おそらく北海道防衛を相談していたと思われる。

## (7) 没後の再評価

アッツ島が描かれている水彩画に季一郎は毎朝拝んでいた。札幌護国神社「アッツ島玉砕雄軍の碑」除幕式・慰霊式には病をおして参列し、2年後の1970年享年82歳で老衰のため死去した。

祖父の没後も各地から講演の依頼を受けている。例えば2018年6月にイスラエル日本学会と日本大使館が主催となりイスラエル建国70周年・明治維新150周年記念シンポジウムがエルサレムで行われる際に招待講演の依頼を受けた。当時ガザからロケットが飛んできていたことから日本の使節団は派遣を中止したが、私はイスラム教徒の聖地であるエルサレムにロケットを発射しないことは歴史上明らかであり安全であると判断し、現地へ赴き講演を行った。2023年6月のオーストリアウィーン大学、ローマ日本文化会館での講演も、駐オーストリア大使、駐バチカン大使の依頼だった。

近年も記念館の開館や顕彰石碑の建立、そして北海道で銅像の建立を検討するなど、没後時間が経っているにも関わらず祖父の足跡を称えていただくのは大変光栄だと思っている。祖父は自分の功績を人に言ったり、自慢したりしない人だったのでそれを伝

えていくことが自分の役目だと思っている。

#### 4. 質疑応答

樋口中将の日本のことを思う熱い気持ちや人生観はどのように生まれたかを教えてほしいという会場からの質問に対して、「当時日本人は貧しい中であっても、日本のこと・日本の将来のことをだれもが真剣に考えていた時代だったと思う。祖父は日清・日露戦争を少年時代に体験し、勝ちはずが実態は国難な状況であり、世界に握りつぶされてしまうという危機感があった。生き馬の目を抜くような外交をヨーロッパの第一線でやってきたことが大きく影響していると思う。戦争についても、終戦後アメリカが来ることを考えて、いかに負けるかということを考えていた。そして祖父は当事者として史実を書き残す意味があると考えていて、晩年はよく書き物をしていた」と教えていただきました。

当会の米川副代表からは、母親が1945年8月の三船殉難事件に受難したが、無事に到着できた船に乗っていたことから、もし樋口中将を含めた先人が北海道を守っていなければ、この場所にいなかったかもしれないという話がされました。

#### 5. おわりに

隆一先生から「本筋とは思われていないものでも、それをつなぎあわせると真実が浮かび上がってくる。全て、特に重要なことは本に書かない」と話がありました。表面的な情報では物事の本質は分からないということは、今も昔も変わらないと感じました。

近代史を学ぶことは今につながり、そして今後の日本の道しるべになるということを痛感し、先人が残してくれた北海道をしっかりと守り、後世に引き継いでいかなければならないと思います。「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」という格言がありますが、私は、そして私たち北海道スタンダード研究委員会は後者であり続けたいと思いを新たにしました。

講演を聴いて“樋口季一郎の決断と行動”を支えたのは、樋口中将の人並みならぬ“勇気”だと感じました。具体的に挙げると「厳しい状況でも将来の

ことを考えて決断する勇気」「最善策を考え抜いたうえで周りを説得する勇気」「関係国(者)に対して是々非々で主張する勇気」です。

これらの勇気はいつの時代であっても、自分が信じることや大切なことを守り抜くための要諦として心に刻みたいと思います。



写真-4 懇親会後の記念撮影

最後になりますが、当勉強会開催にあたりまして、多くの方のご縁をいただきながら、当会代表の大槻が幾度なく樋口氏へ接点を持ち実現したものです。北海道に住んでいる私たちが一番知らなければならぬ「樋口中将の決断と行動によって守られた北海道の歴史」について、本やインターネットだけではなく、お孫さんの口からのリアルな話にふれることができ、大変感慨深い勉強になりました。このような勉強会を通して、多くの北海道民が今の北海道が在ることを知るきっかけになればといたら、北海道スタンダード研究委員会の一員として大変嬉しく思います。

市橋 加代 (いちはし かよ)

技術士(上下水道部門)

日本技術士会北海道本部 幹事  
社会活動委員会(北海道スタンダード研究委員会) 副幹事長

